

近代日本の佐賀・アジア主義人脈の再検討をめざして

山崎 功[†]

The Saga-Asianist Network and the Modern Japanese Advance toward Asia

Isao Yamazaki

The article is trying to illustrate the modern Japanese commitment to Asia with shedding light on the “Saga-Asiatic network”. After the decline of the *seikanron* (insistence to send a military expedition to Korea) advocates, Toho-kyokai (Eastern Nations Association) was formed as a gathering place of ambitious men with variety, namely like the survivors of Samurai rebellion in the early Meiji-period, remnants of Minken-ha (the Freedom and People’s Rights Movement group), unsophisticated Asianist aiming for the cooperation with Asian nation against the western imperialism, etc. The author is focusing on the Toho-kyokai as a fountainhead of Saga-Asianist network, playing the critical role for the modern Japanese advance toward Asia by the end of the Pacific War.

はじめに

明治以降、方言は「標準語」に統一され、地方の多様性・自律性は中央の統制下におかれていった。柳田國男の東北・沖縄における民俗学調査は、「集権化と均質化」のなかで消滅しつつある地域文化の採集・記録の試みとして知られているが、「原日本」の常民のルーツを探るこうした試みもまた、日本のアジア膨張・植民地化による「ひとつの日本」を正当化する政策にとりこまれていったとの批判があるのも確かである¹。こうしたなか、特に1999年、赤坂憲雄らによる『東北学』の刊行と「東北学」の提唱は特筆すべき動きとして知られている。赤坂は、「東北」を「八世紀終わり、征夷大將軍の名の下に日本がはじめて異族を征服・平定した土地としてこそ、東北は『はじまりの場所』だといえる」と述べ、「はじまりの場所」としての東北学を提唱、活動が継続されている²。一方、琉球処分以降の「皇民化」のなかで形成された沖縄社会や沖縄人の苦悩を解明すべく提唱された伊波普猷の「沖縄学」以来の営為は、その後の沖縄戦、戦後米国統治、本土復帰を経て、今日新たな問いかけがされているという。依然として存在する本土との格差、米軍基地問題などの厳しい現状にいかに対峙すべきか、日本から沖縄への「興味・関心」はこれまでにない広がりを見せているが、今日の「沖縄学」・沖縄研究は果たして沖縄からの切実な問いかけに応答するだけの構想力を備えているのか、という厳しい問いかけが現在なされ、『沖縄・問いを立てる』の刊行にみられるような精力的な動きをみせている³。

その一方で、近年の地方分権論議を受けた「道州制」の動きに呼応するかたちで、多様な動きがあらわれてきている。「環日本海地域全体を、日本海を共有するひとつのまとまりとしてとらえ」る「日

[†] 佐賀大学文化教育学部准教授

本海学」，考古学的・歴史的一体性に着目した「東海学」，さらには2007年には交通史や貿易史を通して「アジアの中の九州」という広い視点に立った「九州学」研究会が福岡市に発足している。また佐賀においては，2006年，「地域（佐賀）の固有性と普遍性を探究し，新たな学問体系としての地域学を創造」するため，佐賀大学地域学歴史文化研究センターが発足するにいたっている。

その一方，現代の日本国内および我が国を取り巻くアジア情勢は，世界経済の牽引車であった中国経済の減速と日中関係悪化，中国に代わる提携先としてのインド，東南アジアに対する過度ともいえる期待感の高まりがある。その一方で国内には内向きのナショナリズムが台頭の兆しを見せ，「対外硬」派ともいえる声も聞かれるようになってきた。のみならず戦後日本の国際関係の機軸となってきた日米関係は大きな曲がり角にきている。かつて日本は，欧米協調とアジア回帰の狭間に動揺し，孤立感を深め，破局を迎えた。

本稿では，歴史的評価が定着し，国内外はもちろん郷土においても忘れられかけた団体・人物の郷土史における再発掘・批判的再評価と，双方向的な日本＝アジア関係史におけるそれらの批判的再定置を結び付けることにより，過去の「内向き」・「対外硬」な人脈・風土の限界と可能性の実証分析を通じて，佐賀の「葉隠」に代表される地方文化の独自性の問題，現代日本の「内向き」・「対外硬」な風潮・世論とどこか「既視感」のある現代日本の東南アジア回帰の背景を考えてみたい。

1. 佐賀・旧肥前佐賀藩の育んだ思想・人脈

佐賀，旧肥前佐賀藩は，徳川幕藩体制のもとでもきわめて特異な性格を持つことで知られている。

その第一は，ヨーロッパの文物の積極的な摂取にみられる合理主義である。佐賀藩主は歴代西欧に対する関心が極めて高く，医学分野に代表される蘭学の導入をはじめ，長崎を窓口として他藩に先駆けてその吸収に努めてきた。このことは福岡黒田藩とともに1年おきに長崎警護役を任じられたことによる「役得」によるところが大きいともいわれている。幕末の佐賀の所蔵する洋書730部は，幕府の「蕃書調所」に次ぐコレクションといわれるほか，さらに「長崎警護の役目上不可欠」との口実で藩の軍制近代化に努め，最新式の銃砲，精錬所や工場，造船所さえも備え，軍艦も保有する，小藩ながら日本屈指の「軍事大国」となっていた。だが鍋島直正は維新の動乱に際してはギリギリの段階まで佐幕的「傍観者」の立場をとり，このことが維新初期の佐賀勢の「出遅れ」にもつながることになったといわれる。そしてこの「出遅れ」を取り戻し，一躍雄藩として躍り出る切り札となったのが，戊辰戦争の帰趨を制した佐賀藩の「アームストロング砲」であったことはいままでもない。「アームストロング砲」は，幕末の先進佐賀の誇りとして佐賀の人々にとって特別の意味をもち続けている⁴。

第二に，「思考力や判断に優先する行動精神，狂気的美」（滝口康彦『佐賀歴史散歩』）といわれる『葉隠』に表れたファナティックな非合理主義と，鍋島藩そのものに対する絶対的忠誠，「二重鎖国」という言葉で表現される佐賀の閉鎖的性格である。「佐賀藩兵四十名あれば他藩の兵千名にあたる」と直正公が豪語したといわれる幕末最強の軍勢力ゆえに，藩内事情を幕府や他藩に知られぬよう細心の注意を払ったという。また，「武士道とは死ぬこととみつけたり」，「死に狂い」に代表される『葉隠』は佐賀藩のこうした良くいえば求心性の強い，悪くいえば排他的な政治文化を象徴するものであるといわれる。

このような特殊な風土のなかで培われた佐賀人脈は，大隈重信に代表される合理主義に基づく「脱

亜」の肯定と欧米との協調路線、もうひとつは島や江藤にみられるような、排他的なまでの狂おしい求心性に基づいたアジア主義的心情、こうしたふたつの両極的な性格を持っている。

佐賀の風土が育んだこうした両極的な性格は、そのまま近代日本のナショナリズムが歩んだふたつの対極的な対照的な路線の振幅と符合するのではないかというのが本稿で提示する問題関心のひとつである。この佐賀人脈は、合理主義・ときに軽薄なまでの対欧米協調と、ときにファナティックな伝統・アジア回帰志向の両極端を行き来する。なかでも、日本のアジア関与のプロセスに、コインの両面のように「内包」するアジア「提携」と「侵略」の両義性、また開明性と排外性という双極の性格をもまた佐賀人脈の中に見出すことができるであろう。とりわけ、明治期の対外硬派・副島種臣らにより創設された国権論的色彩の強いアジア主義団体「東邦協会」と同会を取り巻く人脈の幅広さには驚くべきものがある。筆者は現在、日清戦争以降の日本のアジア関与が帝国主義的に制度化されることによりその中に取り込まれ、挫折していった対外硬派・アジア主義者と軌を一にした「東邦協会」の変容・消滅過程と、「東邦協会」新世代による新たな平和的経済「南進」の試みの検証を、明治・大正期経済「南進論者」、日印協会理事として、1930年代日印貿易摩擦解決に尽力した副島八十六とその人脈に焦点を当て、試みているところである。

2. 佐賀人脈の北進関与

明治初年における鍋島直正、江藤新平、島義勇の北海道開拓への寄与、副島種臣による樺太買収論など、佐賀と「北」との関わりは想像以上に深い⁵。明治3年から4年にかけて参議副島種臣は、「時恰モ魯西亜ハ合衆国ニ向ヒ、ペウりんぐ海峡ノ北ナル、北亜米利加西端ノ領地ヲ売シノ挙アリ」との国際情勢を踏まえ、「貴国ノ面積ノ広大ヨリ見レハ、柯太ハ弾丸黒子ノ地ニ過キス、貴国何ゾ斯ル小島ニ意ヲ勞スルコトヲナスヤ、宜シク此全島ヲ日本ニ買取ラシメヨ」とロシアとの外交交渉を通じて樺太買収を進めようとした。だが黒田清隆の建議により樺太はロシアに還付することと廟議が決し、副島の樺太買収は水泡に帰することになった。さらに時を同じくして突如三条実美が太政大臣に就任したことも、副島の憤懣やるかたないものであった。これは「太政大臣を置くと権殆ど主上に迫まる」ことになるので太政大臣を置かず左大臣を上席として三条が左大臣に、副島が参議となることになった申し合わせが覆されたのであった。これらを不服として副島は参議の辞令を返上、いわば参議を「擲げやって仕舞つた」のである。こうしたところにも副島の激しい性格が表れているといえよう。間もなく、外務卿であった岩倉具視が遣欧使節団として外遊することになると、その後任として副島が外務卿に就任することになる。岩倉、大久保らの外遊中に巻き起こる征韓論は、まさに副島が外務卿として対朝鮮、中国外交の当事者となり展開することになる⁶。

宇都宮太郎が述べた「直茂公の肥前を返上して威鏡に代封せられんことを太閤に請はれし故事」あるいは有田・伊万里焼の隆盛にみるまでもなく、佐賀の人々の朝鮮・中国に対する親近感は強いものであった⁷。特に江藤は明治初年における欧米列強の中国進出を受け、「支那は亜細亜の争地なり。不得之者は危く、いやしくも之を得れば、亜細亜の形勢を占領するなり」、「夫支那を取り、亜細亜の形勢を占め、賢に任じ、能を使い、政治を整ひ、民心を安んじ、終には米、魯、倭と世界を可争なり」とする対外策を岩倉右府に上申、中国問題に対する強い関心と、ヨーロッパ諸列強に伍したその積極的な帝国主義争覇戦への意欲を明確に述べている⁸。この献策は、当時朝鮮問題に最も強い関心を持つ

ていた西郷隆盛に取り上げられている。このことを佐藤守男は「鍋島～江藤の流れと島津斉彬～西郷隆盛の流れが、ここにおいて完全に合流」したと指摘している⁹。だが征韓論敗北後西郷とともに江藤、副島らの下野を受けて佐賀・薩摩閥のアジア主義潮流は傍流化し、人々の関心は専ら国内に向くことになる。松浦正孝は、佐賀人脈の内包するアジア主義的性格を考察するなかで「鍋島直正に始まり江藤新平、福島安正（長野出身、江藤の書生）、宇都宮太郎と連なる佐賀閥の人的系譜」の存在を指摘、征韓論の敗北下野以来、「薩摩・佐賀閥」として、海軍主流及び陸軍傍流として、長州藩閥及び政友会を中心とした政党政治と対英米協調の時代に伏流として地下水脈を形成し、のちの対米英開戦へと連なる昭和期南進を推進した汎アジア主義勢力として台頭していったことを指摘している¹⁰。

3. 佐賀アジア人脈における山口五郎太と日清戦争

北海道開拓に大きく関与した直正公、島義勇、樺太買収を建議した副島種臣、中国を得る者はアジアの形勢を占領すると当時の帝国主義の本質を喝破した江藤新平、枚挙に暇のない佐賀アジア人脈として、さらに記すべき人物に、山口五郎太がいる。『東亜先覚志士記伝』は、小澤裕郎、曾根俊虎らと並んで最も早くから中国に入り込んでいた民間志士として山口の名を特に挙げている。山口は同郷の副島種臣の知遇を得て大陸との関わりをもつようになったようである。明治5年には函館学校ロシア語科に入学、「魯学修行」のため、黒田清隆次官のもとで開拓使三等附属を拝命している。明治5年、入学願い出の際には、もし願い出がかない、修行のあかつきには「終身北海道ニ粉骨尽力奉報御恩」と誓っているが、山口は翌年には函館学校を退学している¹¹。退学後の明治7年「佐賀の乱（佐賀の役）」への関与については不明だが、副島種臣の意向を受けて征台の役に際して台湾、さらに中国へと渡り、清仏戦争に際しては民間志士として小澤らと福州組事件に関わり、その後も大陸浪人として日清戦争の背後で活躍することとなる。『宗方小太郎日記』には、明治24年から25年にかけて山口と宗方が相互に訪れていたことが記されており、日清戦争前夜の中国における山口の知られざる動静の一端を垣間見ることができる¹²。また黒龍会『東亜先覚志士記伝』は山口を次のように高く評価している。

山口は明治七年の征台の役に際し台湾に渡り、皇軍凱旋の後是对岸の福建に渡つて蘇亮明と称し、早くから哥老会の一味と接触を保つてゐたのである。世に福州組と称せられる我が志士の一団は即ち此の小澤、山口等の仲間を指すのであるが、彼らが活動を起すのは明治17年の清仏戦争からである¹³。

小澤裕郎は山口らとともに明治17年の清仏戦争に乗じて蜂起、中国の福州に日本の勢力を扶植しようとしたが失敗に終わる。後述するように、小澤はこの失敗を契機に副島種臣を擁立、東邦協会を設立することになる。

江藤、副島らの下野以降、明治10年代の殖産興業を通して関税自主権をめぐる諸外国との条約改正が大きな問題となり、田口卯吉の「北海道開拓論」（『東京経済雑誌』明治14年）にみられるような、「士族殖産」を目的とした「内国殖民論」が人々の主要な関心となる。外交的には朝鮮・清国との緊張関係が高まり、「我邦利益線ノ焦点ハ実ニ朝鮮ニ在リ」（山縣有朋「外交政略論」明治23年）との

言にもあるように、日本の帝国主義的対外膨張の「制度化」が開始される。明治10～20年代には朝鮮が日本の「利益線」となり、さらには日清戦争、福沢諭吉が「脱亜論」においてその関係謝絶を宣言した頑迷固陋な「亜細亜東方の悪友」¹⁴ 清国に対する敵愾心の高揚は、容易に蔑視意識へと転化することになる。日清戦争当時、また一説には日清戦争に先立つ明治21,2年頃作られたともいわれる当時の流行歌「欣舞節（日清談判）」（作詞・作曲 若宮万次郎）は、日本が「脱亜」を決意し、清国との軍事衝突も辞さない列強流の帝国主義を選択した近代日本人が抱くことになる対中蔑視観を如実に吐露するものとなっている。

一番 日清談判 破裂して 品川乗り出す 吾妻艦 西郷死するも 彼がため 大久保殺すも
彼奴がため 遺恨かさなる チャンチャン坊主
二番 日本男児の 村田銃 剣のキツ先 味わえと なんなく支那人 打ち倒し 万里の長城
乗っ取って 一里半行きゃ 北京城よ 欣舞 欣舞 欣舞 愉快 愉快¹⁵

さらに佐谷眞木人が指摘するように、この「欣舞節」が草の根の自由民権運動の担い手である壮士芝居に由来するものであること、歌詞が征韓論に破れた西郷を思慕するものとなっていることなどを挙げ、来るべき日清戦争は「征韓」という「西郷隆盛が果たせなかった理想」を実現するための戦争であったというのである。結論を先取りするならば、東邦協会は、まさにこの西郷の夢を果たすべく結成された団体であったといえるかもしれない。

4. 東邦協会と副島種臣をめぐる佐賀人脈

「東邦協会」は、日清戦争前後を最盛期として高まった朝野の中国・朝鮮問題への関心を反映して副島種臣、犬養毅、田口卯吉、大井憲太郎、志賀重昂らが関与したアジア主義的民間調査団体として知られている。だが安岡昭男によれば、清仏戦争の混乱に乗じた小澤豁郎、山口五郎太ら大陸浪人らによる「福州組事件」の挫折をきっかけとして小澤が中心となり、征韓論に敗れて以降隠退していた対外硬の「長老」副島種臣を擁立したものである。列強による植民地化の危機に対抗して日本を盟主としたアジア連帯を志向しつつも、帝国主義的な国権拡張をも意識した、中国・朝鮮に対する「侵略的」性格をも内包したものであったことが示唆されている¹⁶。また壬午庚申事変の「失敗」と大阪事件での民権左派挫折後の大井憲太郎らが合流、1891年「東邦協会」が発足したこともその国権的・対外硬的性格を示している。

一方、『大東合邦論』著者として知られるアジア主義者・樽井藤吉もまた副島種臣の知遇を得て「福州組事件」応援に加わり、『佐賀新報』主筆を務めており、明治期アジア主義が日本「帝国主義」制度化の中でその中国・朝鮮「侵略」の陥穽に捉われ、挫折衰退していく「東邦協会」・佐賀人脈の中に位置付けることができる¹⁷。

日清・日露戦争を経て日本はいわゆる「満蒙特殊権益」を獲得、日本は国策としての朝鮮・中国大陸への帝国主義進出を本格化することになる。それまで小澤豁郎、山口五郎太ら大陸浪人や民間の「壮士」たちが、「侵略」的性格と素朴なアジア連帯意識をないまぜにしつつ、非公式に、いわば捨石として押し進められていた大陸進出は、やがて「官制化」され、公式の政策として制度化されていく

ことになるのである。このことは、「征韓論」以降下野した勢力の、薩長主導に対抗する圧力団体として、はたまた民権派壮士たちの「梁山泊」的な団体として一定の役割を果たしてきた東邦協会の曲がり角でもあった。「征韓」という「西郷隆盛が果たせなかった理想」が日清戦争によって実現してしまったことで、その存在目的が曖昧となってしまったのである¹⁸。

5. 明治期南進と副島八十六

こうしたなか、人々の「南」への関心は限られたものであった。それでも1887年、日暹修好通商に関する宣言がなされ、日本人の南方雄飛の先達、山田長政ブームにみられるように、ちょっとした南洋ブームが起きている。特にのちの暹羅初代弁理公使となる稲垣満次郎の1893年の濠州・南洋踏査を踏まえた東邦協会などにおける講演活動は、殖民先としての南洋に対する関心を喚起したことは間違いない¹⁹。この動きは、北海道を中心とした「国内殖民論」から「海外殖民論」へ、海外移住思想への転換にも表れている。田口卯吉は「南洋計略論」を1890年に著し、「土族授産」をめざした「南島商会」による小笠原・ミクロネシア方面への南進を試みている。この田口の試みは、明治期日本における小笠原からオーストラリアをも含む漠然とした「南洋」認識をつくりあげたといえよう²⁰。やがて1897年稲垣は駐暹羅弁理公使として日暹通商航海条約の調印に尽力、明治20年代「南進」の一画期となる。そして明治も30年代に入ると、朝鮮・中国情勢の緊迫化の一方で海外殖民先としての「南洋」に対する関心が、新たな世代の南洋専門家によって喚起されることになる。直正・江藤以降連綿と続くアジア主義人脈が伏流化し、東邦協会の活動も徐々に衰退していくなかで東邦協会を担う新世代として登場、以後一貫して対英協調を主張した大隈の右腕として、平和的経済南進を支えた副島八十六の存在である。副島八十六はその代表作『帝国南進策』のなかで次のように述べている。

而も吾人は世の謂ゆる北守南進論を取る者に非ず。日本興隆の気運は必ず当に東西南北に於ける進展となりて出現せざる可らず。南方に前進するが故に北方に退守せざる可らざるの理何処に在りや。吾人は機会の生ずる毎に、国力の許す限り、世界の公道と国際の条規に抵触せざる限り、四方八面に向かつて大活動を試みんことを主張せざるを得ず²¹。

副島八十六といっても、今日佐賀においてその名を知る人はほとんどいない。矢野暢は、「自ら南洋に赴き探検その他に従事して、いわば南方関与の先駆者ないし殉教者というイメージをまとい、後の時代に日本が国策として「南進」政策をとり始めたとき、政治的シンボルとして祭り上げられる人びと」のひとりとして副島八十六の名を挙げている。副島は上京克己苦学、大隈の支援を得て南洋探検家としての地位を固め、大隈を支える憲政会院外団として活動、大隈の掲げる日英協調と日本の平和的経済南進を日印協会理事としてあくまで忠実に具現化しようとした人物であった²²。

明治も30年代に入ると、朝鮮・中国情勢の緊迫化の一方で海外殖民先としての「南洋」に対する関心が喚起されたことは既述のとおりである。このような空気のなか、大隈を「廿二回」訪問してその知遇を得、南洋への足がかりを得た副島八十六は南洋探検家としてタイ・マレー移民のための現地調査を大隈に提案する。そしてついに大隈の尽力により1899年2月、帝国大学東京地学協会囑託として暹羅（タイ）に向け出発することになる。この視察計画はタイ・マレーのほかビルマを経てイン

ドへと及ぶ2, 3年にわたる遠大なものであった²³。さらに副島はマレー、タイ、インドのみならず蘭領インド（インドネシア）にもその足を伸ばしている。副島はインド巡遊ののち明治34年には東京帝国大学より南洋の人類学調査嘱託、また農商務省の蘭領東インド商況調査嘱託を受け、蘭領インドに渡航する²⁴。蘭領東インド、スラバヤの副島を訪問した押川春浪らはその「豪傑」ぶりを次のように回顧している。そこには裸一貫佐賀から上京、克己苦学の末いささか強引に大隈の知遇を得て立身し、ついには「長さ五寸幅二寸五分もある堂々たるもので其面には法性寺の関白も三舎を避くるばかりの長い肩書が麗々と並べてある」名刺を持ち歩く副島の姿があった。そこにはおそらく「帝国大学嘱託」をはじめ数多の肩書が並んでいたであろう。「巨星」大隈の後ろ盾を得た「無邪気」な、「屈託のない」明治の豪傑の一面がはっきりと表れている。

「僕は、大隈伯から依頼されて、熱帯の壯観たる蘭の採集に出かける意だ。」と号して立派なクロース金文字入りの洋書を持ち出し、「見玉へ、是が蘭の種類だ。是等は総て爪哇の深山幽谷でなければ発見されないの、僕は不日其探検に上るのである。」また副島は「僕は時々軍事探偵と誤まれ困ったことがあつた。」と告白、鞆の中からもったいぶって一葉の地図を取り出し、声をひそめて物々しく語っている。「是はね大きい声では言はれないが、聊か軍事的の意味があるのだ、非常に重要な品だから、他人が来たら必ず隠して呉玉へ」。いかにも芝居がかった副島の振る舞いを、押川らは感慨を込めて語っている。「此時さう思つた、副島君は豪傑なるかなど。」²⁵

6. 東邦協会の刷新と日印協会大隈会頭就任

南洋・印度方面の長期探検・調査を成功させて、南洋探検家としての名声を確立した副島八十六は、1904年11月副島種臣らにより東邦協会幹事に推薦されることになる²⁶。樽井や大井のような民間の明治期アジア主義が日清・日露戦争を節目とする日本の「帝国主義」制度化の中でその中国・朝鮮「侵略」の陥穽に捉われ、挫折衰退していく過程の中で、東邦協会もまた数多のアジア関係団体乱立盛衰の荒波に飲み込まれていくことになる。こうした中、衰えつつある協会存続に強い危機感を持った副島種臣ら協会幹部が「新しい血」を入れるべく白羽の矢を立てたのが、大隈が目をかけ育てた「南洋探検家」副島八十六であったと考えられる。

新幹事推薦を受けた副島八十六は東邦協会において自らの「南方経営論」を披歴、現場体験に根差した革新的な提案を早くも行っている。第1に領事館の増設、第2に銀行支店の各地への開設、第3に政府助成による採算を超えた南洋航路の拡張、第4にタイ、マレー、フィリピン、インド各地の現地語に重点を置いた外国語学校の整備、第5に殖民学校の開設、第6に人文社会自然科学の専門家を動員した総合的「東南洋探検隊」の派遣である。大陸経営も緒につかんとしている当時の段階において、これだけの具体的提案を行った副島の卓見は高く評価されるべきである²⁷。さらに翌年4月、ジャワの有力華僑邱鸞馨来日にあたり国内の教育・商工業施設視察の案内をするとともに、東邦協会茶話会でのジャワの教育と商業についての邱の講演のマレー語通訳にあたっている²⁸。東邦協会のみならず日露戦争当時の思潮は専ら「北」、すなわち中国東北地方や朝鮮、樺太方面に対する関心を主たるものとしていたが、副島八十六の活動により、人々の南方に対する関心をつなぎとめる役割を果たしていたことは確かであろう。実際、日タイ国交樹立に大きな役割を果たした稲垣満次郎の東邦協会での日タイ関係、オーストラリア・東南アジア歴遊などを通じた積極活動をピークとして東邦協会

の南方関心も急速に冷め、協会の掲げる対外硬の「北進」も日清戦争という究極のかたちでの政策実現・制度化によりその民間団体としての意味・役割を見失いつつあったといえるのである²⁹。一方で当時の日本は台湾領有、遼東還付を経て激化する満州・朝鮮半島の政治的緊張を目の当たりにして世情はもっぱら北に向いていたといえよう。こうしたなか、いち早く「南」に目を向け、新たな民間団体を結成する動きも一部ではみられはじめた。日清戦争以降日本の紡績業勃興につれて原料綿花を英領インドより輸入して綿布を製造、インド向けに輸出する日印の経済関係がはじまるのである。日英同盟下の両国関係を踏まえて1905年、日印通商条約が調印され、英領インドは以後米国、中国、蘭領インドと並ぶ日本の主要貿易相手国のひとつとなる。とりわけ英領インドは他と異なり原料綿依存先として第一次大戦まで日本の輸入超過が続く例外的な貿易相手であり続ける。

7. 日印協会と大隈重信

インド遊歴経験者やインドに対して「特別の趣味関係を有する」男爵神田乃武、南條文雄、田口卯吉らの首唱により在留インド人と共に組織された日印倶楽部をもとに、1903年12月日印協会が発足する。「同協会は毫も政治上の意味を含まず印度の文学風俗に就て研究及び商業上の連絡に付て両国人共同の活動をなさんとの趣意」にあることを明確に宣言していた³⁰。その後日露戦争により事業中断を見るが、1906年平和回復を受けて活動が再開、長岡会頭死去を受けて大隈重信を会頭に迎える。翌年4月在日インド留学生らにより17世紀マラータ王国を建国したインドの民族的英雄シワージを顕彰し開催されたシワージフェスティバルにおいて大隈は次のような英国観、インド観を表明している。

……茲に注意せねばならぬことは一国の滅亡は他の侵略に依て起るものではないと云ふことである、……樹先づ朽ちて蟲之に着く、……印度を亡すものは仏に非ず、英にあらず、実に印度人自らである、……

イギリスの植民地下に呻吟するインド民族に対してインド人自らの「自己責任」を突きつけるこの突き放した態度をどう考えるべきであろうか。さらに大隈は次のように続けている。

幸にして今の印度皇帝即ち英国王は世界無比の仁君である、……諸君にして若し衰亡の因を以て罪を英国に帰するものあらば心得違ひの最も甚だしき者である、……印度の将来は唯だ印度国民の反省によりて認め得べしと。……³¹

英国王を「世界無比の仁君」と称し、インド民族運動に対する余りに冷ややかな大隈の演説は、実際には参会したインド人らを落胆させ、同席した中国人革命家章炳麟は大隈に対する怒りを爆発させたという³²。

大隈自身は、「未だ一度も他国民を扇動して感情に訴へて欧羅巴文明を呪ひ、欧羅巴文明に対抗しやうなどと云ふやうな事を言つたことがない」と弁解、一貫して日英同盟強化論者であった。日露戦争後大隈が会頭に就任した日印協会はあくまで日英同盟を基調とし、「一意専心経済的發展を計る」

ための日本の経済的南進を支える経済文化友好団体であったのである³³。

こうした大隈会頭率いる日印協会の「対英協調」姿勢は、伏流となって流れ続けるアジア主義とぶつからざるを得ない。1920年11月、日印協会は、予て英国の印度政策を激しく攻撃してきたアジア主義思想家大川周明に対して退会を迫り、会を揺るがす大きな騒動となる。そして大川に退会を迫ったのが副島八十六その人であった。当時読売新聞はこれを「日本人までが手先になり迫害するとは何事」と激しく非難、「其後新会員名士が殖えると印度人を扶けんとする会の本来の趣旨は何時の間にか忘却され、一方益々親英的な態度が濃厚となつて、印度を目するに印度人の印度でなく英人の印度視する様になつて来た其為め肝心の真に印度を思ふ印度人の如きも凡て退会して、今日では殆ど英国政府の閑居を得たる印度人富豪数十名と邦人の親英的学者及び親英的商人との殆ど経済的親善機関になつて了つた……」さらに大川は副島に退会を迫られた経緯を新聞に暴露、副島はつぎのように大川に退会を求めたと述べている。

何うも君が会員となつてゐては英国側の受けが非常に悪い、此間も会が主催して印度観光団を組織しやうとしたのだが、君が会にゐるといふ理由で駄目になつて了つた其処で会の意向として君に退会して貰う事に決つた

それに対して大川は「僕が居ると何うして英国側の受けが悪いのか、誰が然う云ふ事を言つたのか」と問い返すと、「然う云はれると僕も困るんだ」と告白、なんとも歯切れの悪いものであったようである。数日後再び大川を訪れた副島は改めて大川に退会を迫り、結局大川は自分から退会すると述べたのであった。大川が憤激して述べたように、日本人である副島が自ら「其手先きになつて同じ同朋を迫害する」ことになったことを、副島はどのように受け止めたのであろうか。そもそも日印協会に入会を勧誘したのが副島であったことから、副島の心中は忸怩たるものがあつたと想像できる³⁴。いずれにせよ副島八十六は以降、大隈の主導する「日英協調」による対インド経済進出を具現化する、いわば会頭大隈の「右腕」として、日印協会での本格的活動を開始することになる。

8. 第一次世界大戦の「天佑」と大隈「対英協調外交」

「今回欧州ノ大禍乱ハ日本国運ノ発展ニ対スル大正時代ノ天佑ニシテ、日本国ハ直ニ挙国一致ノ団結ヲ以テ、コノ天佑ヲ享受セザルベカラズ」、大隈内閣はここに第一次世界大戦参戦を決定、1914年8月23日、対独宣戦を行う³⁵。地中海・インド洋方面に海軍を派遣、中国、ミクロネシアなどのドイツ根拠地を攻略占領することになる。だが東邦協会の川久保健（東京日日新聞記者）は対独宣戦の日、厳しく大隈内閣批判を行っている。

どうも大隈内閣はとんでもないことをやらされましたね。これでは日本将来の進路が塞がれてしまつたと言つて差し支へない。大隈や加藤などいふ人物はいけませんよ。大隈軽信、加藤不高明とでも改名させるんですよ³⁶

そののちの1915年1月、袁世凱の北京政府に対して悪名高い対華二十一ヶ条要求を提出、最後通

牒を突きつけ5月には受諾させる。中国側はこの受諾の日を「国恥記念日」とし、中国民族主義の歴史に深く刻み込まれたことはいうまでもない。何故に大隈がこのような不当過酷な要求をしたかについて木村時夫は、第1に当時の中国国内情勢が革命勃発による南北分裂の混乱状態にあり、大隈が中国は日本の指導と協力なしには独立できないと考えていたこと、第2に大隈の首相就任が元老井上馨の推挽と山県有朋との妥協によるものであったこと、第3に当時の日本国民大多数が中国における権益拡大を要望、大隈は大衆政治家という名声と自負のためにあえてそれを退けることができなかったこと、これら3点を理由としてあげている。加藤外相自身、その回想で「いざ要求を提起すると決まったら、各方面から、これも要求しろ、いや之も解決して貰い度い、と山のやうな注文が舞ひ込む始末で」あったことを告白している。木村時夫は「元来大隈は綿密細心というよりも豪放粗雑ともいふべき性格の人であった」と述べ、「苦境にある一民族の心情を理解することのできなかつた人とも思われる。」としている³⁷。

大隈は大戦にあたりインド国民挙国一致の愛国の精神を賛美している³⁸。だが1915年2月にはシンガポールにおいてインド兵の叛乱が勃発したことをもちろん大隈は知っていたはずである。英国の依頼を受けてときの内閣としてその鎮圧に協力している³⁹。大隈はあくまで日英同盟の友誼を尽したのである。

こうしてインド洋、太平洋にドイツ軍艦出沒の報が飛び交い、シンガポールに叛乱の烽火があがるなか、英領インド・南洋方面と欧州の輸出入が途絶えることとなる。これもまた日本にとっての「天佑」であった。「日印協会の事業範囲たる英領インド及び南洋方面より欧州品に代るべき日本商品取引開始に関し紹介陸続到来すると同時に関西地方における貿易事業者中にも此際同方面の販路拡張に焦慮し種主同会に交渉し来るもの」が日印協会に殺到する。そこで副島八十六は、1914年10月、「印度南洋方面の貿易助長に便宜を与ふる」ために京阪神地方へ特派されている⁴⁰。

このように、第一次世界大戦を契機として副島八十六は日印協会理事として大隈の掲げる「日英協調」による経済「南進」の旗振り役を、列強と肩を並べた「一等国の紳士」としてすすめていった。そしてその「協調」ぶりが、ときには大川らアジアの民族主義に共鳴する人々との摩擦を引き起こし、副島が反発や怒りを一身に引き受けることになったのも確かであった。

松浦正孝は、第一次大戦前後に大きく変化した「新外交」の時代に顕在化した日本の対アジア関与をめぐる対立図式を、3つに分類している。ひとつは「帝国の時代」の終わりを見据えて満州・中国既得権の放棄、朝鮮台湾への独立許与という理想主義的アジア提携をめざした小日本主義、ふたつめは民間経済交流に基盤を置いた欧米列強との協調による戦争抑止と現状維持をめざす「中帝国主義」、さらに3つめとしては帝国主義「一等国」日本の獲得した満蒙権益の堅持拡張と中国分割も辞さない「大日本主義」の有する「侵略」的性格と「同文同種」に基づくアジア連帯の心情がないまぜになった「大亜細亜主義」である⁴¹。この分類によれば大隈が掲げ、理事の副島が推進した日印協会の姿勢は松浦のいう「中帝国主義」に他ならない。だが現実の副島はもうひとつの顔を持っていた。それは豪放闊達な明治の「豪傑」・「南洋探検家」としての副島の姿である。「青雲の志、押さへ難く、歳十五、足にまかせて三百里、破帽短衣の姿を、銀座の真中に」運び、明治大正期の対外硬・国権主義や民権運動の奔流に血沸き肉踊らせ、「大日本主義」に引き寄せられた数多くの若き豪傑の姿とも重ね合わせることができる。さらに留意すべきは、かつて不平士族の叛乱挫折後、藩閥政府専制への不

満反発が政府批判としての対外硬な「征韓論」へと流入していったように、日中関係の緊張に伴い昂揚する対外硬の思潮が政府の弱腰批判と結びつき、さらには立憲同志会などを中心とする普選運動とも連動していたことであろう。普選実施という民主主義を求める民衆の反政府の声は、尼港事件における邦人虐殺、あるいは孫文第二革命失敗後の反日運動の激化を受けた対外硬の空気のなかで、容易に侵略主義的性格を身にまとうことになる。副島八十六もまたそうした時代の奔流に巻き込まれていくことになる。

おわりに

佐賀アジア主義人脈が伏流化してのち、第一次世界大戦を節目に、日英協調を基調とした経済南進を推進した大隈会頭の日印協会は、一時代を画するものとなった。しかしながら西歐的合理主義を掲げ、対英協調を志向する日印協会はインド民族主義運動と距離を置かざるを得ず、また大川周明に副島みずから退会を迫るなど、アジア主義とは一線を画した団体であった。1930年代日印通商摩擦に際して神戸・関西を地盤とした国内繊維業界を中心に巻き起こったインド綿不買運動の動きに対して、日印協会は依然として対英協調姿勢を貫こうとする。このことは、反英姿勢を強める関西財界の離反を招き、亡命インド人民族運動と連携した関西日印協会創立という事実上の「分裂」を招くことになる。その後日中戦争の激化により対中国政策が行き詰まりをみせると、「南進」に対する潜在的な関心が再び顕在化し、日英協調下伏流となっていた佐賀・薩摩「アジア主義」人脈を受け継ぐ大亜細亜協会など民間の国家主義者・団体が、あるときは官の南方関心をときに「先取り」しつつ、またときにそれと唱和しつつ「下方」から動員する役割を果たし、官民連携による「南進」を推進することになる。ここで忘れてはならないのは、民間アジア主義団体、論者らが最終的に旧態依然の「愚民観」に基づく日本盟主論的な「南進」国策の流れに自ら望んで、或いは否応なく巻き込まれていったことである。アジア民族の解放と連帯を唱えた在野の体験的アジア主義者らが、次第に官製の大東亜共栄圏構想にとりこまれていったことは「アジア主義の限界」を示すものといえるであろう。後藤乾一は、熊本県出身の没落士族で、写真技師としてジャワに渡航、現地の庶民生活に魅入られ、「原住民」とは一線を画した「一等国民」現地邦人社会からは疎外されながらもインドネシア民族運動に挺身、戦後は独立戦争のなか「インドネシア人」として独立のため命を散らした市来竜夫の激しい人生を明らかにしている。また後藤は日本の帝国主義的南方進出の制度化のなかで東京専門学校、米国留学を経て、台湾総督府調査課勤務、さらにはセレベス・ペレン島鉱業所主にまで「栄達」した佐賀の士族出身の「帝国主義」エリート、原口竹次郎の複雑な生涯にも光を当てている。同じ九州人でありながら帝国主義の時代に両極端の道を歩んだふたりの生涯は、近代日本の南方・アジア関与の在り方そのものを象徴するものとなっている⁴²。

一方筆者は、本稿で展望した佐賀・アジア主義人脈のふたつの流れ、大隈の「軽薄」とも評される合理主義と島義勇の狂おしいまでの非合理的な熱情、このふたつの間で揺れ動きつつもアジアへの独特の思いを貫いた明治の青年副島八十六に見出せないかと模索している。日清・日露戦争を経て日本の帝国主義の「制度化（官制化）」に直面し、政府にとってはいわば「用済み」となった対外硬・アジア主義者の「梁山泊」と化し衰退した「東邦協会」・佐賀人脈が、一方で長州藩閥及び友友会を中心とした政党政治と対英米協調の時代に伏流として地下水脈を形成し、のちの対米英開戦へと連なる

昭和期南進を推進した汎アジア主義勢力となる一方で、南・東南アジアを射程に入れた平和的経済南進を唱道した副島八十六のような南進論者や南洋関係企業人らをも輩出している事実がある。つまりこれまで知られることのなかった「東邦協会」・佐賀人脈の伏流の中に、良質なアジア提携と欧米との協調による平和的経済交流を併せ持った「アジア主義」を創出しうる可能性があったのではないかと考えている。つまり大隈に代表される合理主義と直正、江藤の流れをくむ激しい伝統回帰の熱情、この佐賀の育んだ両極的な特性の解明と近代日本・アジアに与えた影響の分析を通じて、近代日本の「アジア主義」の限界と可能性の再考をめざしている⁴³。

註

- ¹ 村井紀 『南島イデオロギーの発生—柳田国男と植民地主義—』岩波書店 2004年
- ² 『東北学』東北芸術工科大学東北文化研究センター 1999年 西成彦「東北—あとくされの土地として」姜尚中編『ポストコロニアリズム』作品社 2001年 127頁
- ³ 屋嘉比取ほか編 『沖繩・問いを立てる』全6巻 社会評論社 2008年
- ⁴ 後藤乾一 『原口竹次郎の生涯』早稲田大学出版部 1987年
- ⁵ 福岡博 『佐賀の幕末維新』出門堂 2005年
- ⁶ 岡本柳之介編 『日魯交渉北海道史稿』1898年 『東邦協会会報』第43号 1898年2月 島善高編『副島種臣全集』第2巻 慧文社 2004年
- ⁷ 松浦正孝 『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか』名古屋大学出版会 2010年 151頁 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策—宇都宮太郎日記』第3巻 岩波書店 2007年(1918年9月21日付)155頁
- ⁸ 黒龍会編 『西南記伝』上巻 黒龍会 1908年
- ⁹ 佐藤守男 「陸軍情報将校と辛亥革命 1878～1911」『北大法学論集』第60巻第1号 2009年 85-86頁
- ¹⁰ 松浦正孝 前掲書 102-103頁
- ¹¹ 『函館市史』第2編 1981年。『北大百年史 史料(一)』1981年所収「明治三・四・五年」、『壬申日誌』, 20, 793, 795頁 『壬申日誌』には、伊万里県士族 山口五郎太、同高木平三郎の名で、開拓使宛て、次のような修行願書が掲載されている。「奉願上候書付 私共儀魯学執心ニ付何卒進歩可相成学校へ入塾仕度志願能候処今般於函館魯学所御取開教師御雇入ニ相成候乎之由承聞仕候ニ付可相成御義ニ候ハ、右教師随従学校入塾被仰付度奉願候然上者留学之後相応之御用ニ被仰付候ハ、終身北海道ニ粉骨尽力奉報御恩徳度漱志切迫不顧恐懼奉願条御宏察之上出格之御処分被威下度此段奉願候以上 壬申三月十四日」
- ¹² 大里浩秋 「宗方小太郎日記 明治二二～二五年」『神奈川大学人文学研究所報』第40号 2007年
- ¹³ 黒龍会編 『東亜先覚志士記伝』上巻 黒龍会 1935年 313頁
- ¹⁴ 福沢諭吉「脱亜論」『福沢諭吉著作集』第8巻 慶応義塾大学出版会 2003年所収 261-265頁
- ¹⁵ 作詞・作曲 若宮万次郎「欣舞節(日清談判)」佐谷眞木人『日清戦争—「国民」の誕生』講談社現代新書 2009年 16-21頁 佐谷は、歌詞中、大久保が殺されたことに関して、もし征韓論が採用され、清国と戦争していれば西郷も死ぬことはなく、西郷の支持者によって大久保が殺害されることもなかった、つまり「西郷が死んだのは中国のせいだ」と指摘している。佐谷前掲書 20頁
- ¹⁶ 安岡昭男「東邦協会と副島種臣」『政治経済史学』169号, 1980年
- ¹⁷ 安岡 同上論文。初瀬龍平「アジア主義と樽井藤吉」『広島平和研究』1号 1977年
- ¹⁸ 大畑篤四郎『日本外交史』成文堂 1986年
- ¹⁹ 稲垣満次郎『南洋長征談』東京 安井秀真 1893年 広瀬玲子「稲垣満次郎の殖民論(その一)」『北海道情報大学紀要』第11巻第1号 1999年 稲垣は東邦協会において「南洋」にも造詣の深い専門家として創立に参加、明治20年代には海外殖民をめぐる講演などを積極的に行っていた。1893年3月、稲垣は東邦協会において豪州・南洋事情を講演後、中国・朝鮮、シベリア方面踏査に向かっている。『朝日新聞』1893年3月28日
- ²⁰ 松永秀夫「田口卯吉(鼎軒)」『太平洋学会誌』1986年1号 126-127頁
- ²¹ 副島八十六『帝国南進策』民友社 1916年 30頁
- ²² 副島八十六については拙稿「副島八十六と近代日本・佐賀・アジア—大隈の日印協会の活動を中心に」佐賀大学・佐賀学創生プロジェクト編『佐賀学』花乱社 2011年 参照。
- ²³ 『朝日新聞』1899年2月20日
- ²⁴ 「履歴書 副島八十六」本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件 日印協会関係 外務省外交史料館 B04012417100
- ²⁵ 中村直吉、押川春浪編『五大洲探検記 第2巻 南洋印度奇観』東京 博文館 1908年 49-50頁
- ²⁶ 『朝日新聞』1904年11月30日

近代日本の佐賀・アジア主義人脈の再検討をめざして

- ²⁷ 副島八十六「南方の経営に就て」『東邦協会会報』第108号 1904年 1-22頁 副島八十六『帝国南進策』民友社 1916年 附録「南方経営論」45-50頁
- ²⁸ 『朝日新聞』1905年4月26日「副島八十六官衛学校視察ノ件」陸軍省「壹大日記」明治38年 防衛庁防衛研究所 C04014050600
- ²⁹ 矢野は次のように副島八十六を位置づけている。「ただ、二十年代初めに沸騰した南洋熱は、朝鮮半島問題をめぐる日清関係が緊張しはじめ、人びとの関心が再び「北」に戻るようになると、またたく間に冷却してしまう。そして、副島八十六らが三十年代につき役を勤める。」矢野暢『「南進」の系譜』中央公論社 1975年 68頁
- ³⁰ 『朝日新聞』1903年12月13日、19日
- ³¹ 『朝日新聞』1907年4月22日
- ³² 大形孝平編『日本とインド』三省堂 1978年 65-66頁、松浦正孝 前掲書 910頁
- ³³ 松浦正孝 前掲書 237頁 大隈重信「日印協会に対する欧米の誤解について」『日印協会年報』第3号 1910年
- ³⁴ 『読売新聞』1920年11月20日
- ³⁵ 木村時夫「対華二十一ヶ条要求と大隈重信」『早稲田人文社会科学研究』第23号 1983年 12-13頁
- ³⁶ 満川亀太郎『三国干渉以後』平凡社 1935年（復刻版 東京 伝統と現代社 1977年）126頁
- ³⁷ 木村時夫「対華二十一ヶ条要求と大隈重信」『早稲田人文社会科学研究』第23号 1983年 19-20頁
- ³⁸ 大隈重信『世界大戦以来 大隈候論文集』大観社 1919年 269-270頁
- ³⁹ 大形孝平編『日本とインド』三省堂 1978年 70-72頁「新嘉坡印度兵暴動事件報告」「新嘉坡印度駐劄軍隊暴動事件」大正4年 海軍省公文備考 巻116 外交騒乱外国人 防衛省防衛研究所 C08020710900
- ⁴⁰ 『読売新聞』1914年10月5日
- ⁴¹ 松浦正孝 前掲書 第3章
- ⁴² 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』勁草書房 1986年 後藤乾一『火の海の墓標』時事通信社 1977年（オンデマンド版2007年）後藤乾一『原口竹次郎の生涯』早稲田大学出版部 1987年参照
- ⁴³ 本稿は、拙稿『『地方』から日本＝東南アジア関係史を考える』（佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究起用第4号2010年）、「副島八十六と近代日本・佐賀・アジア——大隈の日印協会の活動を中心に」（佐賀大学・佐賀学創生プロジェクト編『佐賀学』花乱社 2011年）をもとに、副島種臣の東邦協会の役割と佐賀・アジア人脈について検討を試みたものである。詳しくはこれをごらんいただければ幸いです。